

かわさきしがいこくじんしみんだいひょうしゃかいぎ
川崎市外国人市民代表者会議
(第7期 第2年 第4回 第2日)
ぎじろく
議事録

1 日時 2010(平成22)年2月21日(日) 午後2時～5時

2 場所 川崎市国際交流センター

3 出席者

(1)代表者 20名

高義甲、権純徳、趙龍濟、朴海淑、殷珊珊、上田馨霞、
姜弘、金倍、鈴木新琴、張学峰、古谷史子、楊帆、バラードベルフェ、
中森ジュリア、みどり、エロック、ハリマー、
アディカリ、スティーブ、高橋ロサ、モッサマド、アスリ、
千田マリアナ、オアナ、クシュタ、オレナ

(2)事務局

太田市民・子ども局長、上野室長、清田主幹、青山主幹、阿部主査、
西山主幹、小川課長補佐、三田村職員、渋谷専門調査員、

4 傍聴者 13人

5 会議次第(公開)

- (1) 開会のあいさつ
- (2) 事務局説明
- (3) 議事
全体審議
- (4) 報告事項
実行委員会報告
市の審議会等委員の活動報告
その他
- (5) 事務連絡
- (6) 閉会

6 議事等の経過

【全体会】

趙委員長 「2009年度第4回第2日川崎市外国人市民代表者会議を始めます。まず、太田市民・子ども局長よりごあいさついただきます。」

(事務局太田市民・子ども局長からのあいさつ)

趙委員長 「今回、傍聴で茨城県東海村国際交流協会の方が5名いらしているので、後ほど交流会に参加されるとありがたい。続いて事務局説明をお願いします。」

事務局 「それでは、事務局から今日の日程と配付資料の説明をしたい。配付資料はまず次第があり、資料1は年次報告書完成までのスケジュール、資料1-2は年次報告書、と3つの資料を配っている。今日の日程は全体会議の審議として、2009年度年次報告書について。そして提言について

審議をした後、記念写真を撮る。その後、16時10分から報告事項とその他ということで、おむね17時を目途に審議をお願いしたい。」

趙委員長 「これから議事に入りたい。まずスケジュールについて、事務局の方からお願いする。」
(事務局が年次報告書完成までのスケジュールについて説明)

趙委員長 「続いて2009年度年次報告書について進めていきたい。事務局の方、説明をよろしくお願いします。」

(事務局小川課長補佐が年次報告書案について説明し、第1の提言について読み上げ)

趙委員長 「これは、教育文化部会の方から出された提言案だが、もう少しこうした方がいいのではないかと、もう少し背景にこういうことを加えた方がいいとかという意見はあるか。」

クシュタ委員 「外国人特別入試受験とあるが、川崎市内県立高等学校だけか。私立の高等学校の場合はどうか。」

事務局小川課長補佐 「今回の提言について、教育文化部会では、私立についての議論は特にされていないので、公立に限っての提言となっている。」

クシュタ委員 「私立をつけ加えたらどうか。」

趙委員長 「今のクシュタさんの意見について、皆さんはどうか。」

エロツク副委員長 「私は教育文化部会の1人のメンバーとして答えたい。全く私立の話が出なかったのは、これはあくまでも行政に対する提言ということで、政府が管理している学校ということにとどまった。私立というのは行政のある程度のコントロールはあるかもしれないが、細かいところまでは行政も関与してはいけないのかと思った。これに対して他のメンバー、教育文化部会のメンバーではない方々から意見があれば教えていただきたい。クシュタさんの意見は非常に貴重で、もし第7期でだめでも第8期とか第9期の方に持っていきたい。」

朴委員 「議論もしないで私立を提言に入れることは難しい。次の機会でも私立も視野に入れるということは、私たちが考えるべきだと反省している。共生ができる範囲だけというわけではなく、日本にある全ての学校に視野を広げて検討していく、審議していくというのは大事だと思う。」

殷委員 「私が知っている例で、大学の入学の受験のルールとして、帰国子女等留学生は特別のルールがあり、国立、市立、私立とも実行している。だから、多分高校も大丈夫だと思う。」

張委員 「今回私立を入れるとしたら、今の私立のシステム、外国人の子どもへの募集方法など詳しく調べないと意見が出せない状況なので、次期この話題について続けて深く議論して欲しい。」

趙委員長 「私立に関して含めるか、含めないかというのは、今までの部会で話されてこなかったもので、次期の第8期、ほかの期で再度検討していただきたいということでよいか。」

朴委員 「30ページの高等学校等への進学率が97.8%となっているが、これはいつの統計か、根拠を示して入れた方がいい。その下に外国籍の子どもたちの進学率は60%程度にとどまっているとあるが、この根拠も入れた方がいい。31ページで、神奈川県では来日3年以内の外国につながる子どもたちに特別枠を設けていますとあるが、外国につながる子どもたちというのは、提言集では特別に定義を決めて注をつけてある。それと県で特別募集をしているもののが一致しているかどうか確認したい。」

事務局渋谷専門調査員 「まず97.8%のところは、文部科学省で行っている学校基本調査に基づいて記している。60%という統計に関しては、幾つかの論文や文科省の報告書に出ているが、そのまま書くとかなり長くなってしまふので、提言の形式に沿うかどうかが課題。外国につながる子どもたちの定義については県と一致しているかどうか再度確認する。」

趙委員長 「ほかに何か意見はないか。この提言を全員で審議するのは今回が最後なので、意味がよく分からない文章などあったら、意見を言ってもらいたい。意見がなければ、外国につながる子どもたちに高等学校進学のための支援を充実させるということで異議はないという人は挙手をしてほしい。」(挙手多数)「全員一致ということで、続いては小・中学校における多文化理解教育の充実に移りたい。事務局に説明をお願いしたい。」

(事務局小川課長補佐が年次報告案32ページ提言2について説明。提言文を読み上げ。)

趙委員長 「提言2の小・中学校における多文化理解教育の充実に関して何か意見はあるか。」

朴委員 「最初の提言の1番・2番の文章はすっきりさせた方がいい。1番、「小・中学校での多文化理解教育において、特にその中心である民族文化講師ふれあい事業の今後の参考となる実践集を作成し、多文化理解教育を推進する。」2番は「多文化理解教育は、子どもたちのアイデンティティ形成や自己肯定の重要な機会である。外国につながる子どもたちの文化や言葉を多文化理解教育に取り入れる」というのはどうか。」

楊委員 「32ページの「子どもたちがお互い違いを認め」を省略して、その後の「多文化理解の授業を卒業までに必ず受けられるようにし」という部分を強調して「義務教育期間内で必ず1回多文化理解の授業を受けられるようにし」と表現するのはどうか。」

朴委員 「わかりやすく文章を直してもよいということであれば、「義務教育期間中に多文化理解教育を必ず受けられるように配慮します」として、その次に、「子どもたちの互いの違いを認め合うことについて考えていけるようにします。」「日々学習の中に多文化共生視点を入れることにします。」と文章をつなげてはどうか。この文章の一番冒頭の方に義務教育中に受けられるようにということを一番上に載せた方がいい。」

事務局小川課長補佐 「義務教育という言葉自体が日本人だけが対象となっているので、そういった意味でこの表現は小・中学校ということで統一してはどうか。」

趙委員長 「私は義務教育の時期に必ずやるという以前に、多文化講師の方も明確な授業案がないので、そのために参考となる実践集の作成というのが主題だと思った。そこをまず整備してからその上で今度は1年のうち何回やってくださいということ要望していくのが妥当ではないか。また、外国人といってもさまざまな形態があり、外国につながる子どもたちというのがどこまでを含めるのかというのは、きちんと考えるべき。日本人の名前で学校に通っていても国籍は外国という子どももいるが、メンタリティが確立していない中で、授業をきっかけに急に周囲から外国人扱いをされた場合、子どもにとって精神的なプレッシャーになるのではないか。その意味では、PTAに対してもアピールしたり、意見を聞いたりというような段階が必要になるのではないか。また、親がどちらも外国人、親の一人が日本人の場合など、いろいろなパターンで変わってくるし、当事者である子どもたちの気持ちも尊重したいということもあるので、義務教育には絶対やりましょうというよりは、少しくッションを置いた方がいいと思う。先生たちは、この文章を見てすぐにやらなければいけないと思われる方もいるので、その場合に子どものプレッシャーにならないように、検討してもらいたい。」

古谷委員 「2のところは、「文化や言葉」ではなく「異文化と多言語」としたらどうか。」

朴委員 「提言案では多文化理解教育というのは外国の子どもたちのアイデンティティ形成や自己肯定に大事であるという趣旨に受け取れる。しかし、すべての日本人の子どもも含めて多文化理解教育は大切だと考えるのか。また、「異文化と多言語」を入れる意見について、提言案ではすべての異文化や多言語を全部入れるわけではなく、その学校にいる外国につながる子どもたちの言葉や

文化を説明することになっている。しかし、この意見だと全ての異文化と多言語を扱うということになる。どちらが私たちの趣旨なのか、教育文化部会の意見を聞きたい。」

古谷委員 「提言は2つの柱になっている。1番の多文化の理解。2番は、母語教育を入れてほしい。これが原点になっているので、これは1つにしてもいいのではないか。」

楊委員 「実はこの2番の提案はそんなに議論されていないので、いまだにはっきりとは意味がわからない。これを異文化理解教育の一部の考え方として要素として、背景と理由に移してはどうか。」

殷委員 「1番は実践集をつくること。2番については私の印象では多文化理解教育の授業があると、教室にいる外国人の子どもは普段より元気になっていると思う。これはアイデンティティを周りに認められたということではないか。これは実際にはもう1つの母国教育の意味もある。自分の母国の文化が周りのクラスメイトに紹介されるのは、すごく楽しい感じがあるのではないか。」

趙委員長 「それではまずこの2の提言の1に関してだけの決をとりたい。2に関しては、削除するということがもし今日決まれば改めて事務局の方で背景に移すなど、文章を作り直してその上で皆さんにもう一度配付して、それでオーケーがもらえれば、最後の正副部会長会議にかけて諮りたいがいかがか。それでは、決をとりたい。この1に関して、賛成という方は拳手をお願いします。」

楊委員 「提言は、これを読んで行政が実際に動いて、結果となる。この提言では具体性に欠け、実行しにくいのではないか。」

趙委員長 「それでは、もしこの1と2について全く分離して考えて、2は文章を背景に移すなどして練り直す案が1つ。それから、この2に関して深く審議をされていないのであれば、今回は提言としては見送るという案が1つ。これでどうか。」

朴委員 「私は教育文化部会でないので、詳しいことはわからないが、部会で十分に審議されていないものを全体会議に出すのは問題があると思う。この全体会議で2番の問題を背景に回すか、文章を直して載せるかということを決めてもらいたい。」

張委員 「2の提言の2については、多文化と多言語のことを入れるのが目的。部会で、母語と母文化の話が何回も出ていたので、最後にまとめるときにこの部分については1つにするか、2つにするか話し合った。多数決をした結果2を入れることになった。」

趙委員長 「それでは、ここで全体会議の決をとりたい。提言2-1について提言として承認するという方は手を挙げて。」（全員拳手）「続いてこの2-2ですね。訂正して載せた方がいいのではないかと今案と全く今回は見送るという案である。まず文章を訂正する方がいいという人は手を挙げて。」（拳手多数）「では削除するという人は手を挙げて。」（拳手少数）

趙委員長 「では、文章を訂正するという事によろしくお願いします。ここで15分間休憩とする。休憩の最初に写真撮影をおこなう。」

（休憩の後再開。）

趙委員長 「今度は3番目の提言案について議論したい。事務局、お願いします。」

（事務局三田村職員が提言案3を読み上げ）

エロツク副委員長 「3番目の提言について、意見、質問はないか。」

朴委員 「34ページの最後の段落の文章が長く読みにくいので、文章を切ってはどうか。」

エロツク副委員長 「それではこの提案以外に意見がなければ、決をとりたい。3番目の提言について承認する人は手を挙げて。」（拳手多数）

エロツク副委員長 「全員一致ということで、ありがとうございます。」

事務局三田村職員「先ほどの意見で34ページの最後の段落に丸をつけた方がいいのか、つけない方がいいのかというのは、どちらにすればよいか。」

エロック副委員長「では確認する。2つの文章になった方がいいという人とこのままでいいという人。まず、カットした方がいいという人は手を挙げて。」(挙手多数)

エロック・ハリマー副委員長「では2つの文章にする。」

趙委員長「構成に関しては、最終原案を正副部会長会議の方に一任していただきたい。」

エロック副委員長「では、4番に移りたい。」

(事務局三田村職員が提言案4を読み上げ)

エロック副委員長「4番目の提言について何か意見、質問、わからない点はあるか。」

趙委員長「背景・理由の5行目、「近年は相談件数の増加とともに」という部分にパーセンテージを入れたらどうか。数字を示せば背景・理由の大きな裏づけになる。」

エロック副委員長「今の意見に対して、事務局で何かあるか。」

事務局三田村職員「相談件数は確認できるので検討したい。」

朴委員「先ほどの部分で、「6言語で相談に応じています」というところに6言語の内容を明記した方がいい。」

事務局三田村職員「各言語を表記するという事で承りました。」

エロック副委員長「質問、異議がなければ、承認をもらいたい。では、4番目の提言案に賛成の人は手を挙げて。」(挙手全員)

エロック副委員長「全員ということでありがとうございます。」

趙委員長「それでは、2009年度第7期代表者会議での提言を、以上4つ、皆さんで審議してきました。細かい調整等、正副部会の方で練り直すので、残った課題や検討項目については正副部会長会議の方で諮りたい。その旨、承認していただけるか。承認する人は手を挙げて。」

(全員挙手)

趙委員長「これをもって全体会議を終わりとす。続いて、報告事項の方に移りたい。各種実行委員会報告、委員報告はあるか。」(なし)

趙委員長「続いて、(2)市の審議会等委員の活動報告についてなにかあるか。」

張委員「今月の18日、夜7時から9時、私は川崎市成人式企画実施委員会、最後の会議に参加した。全回の会議に参加した。今までの様子を皆さんに報告したい。今年度の成人式参加者予定者は、1万2千人程で、その中に外国人は388人いた。でも、当日の参加人数がわからなかったの、実際外国人が何人参加したかはわからなかった。その他の情報としては3カ国語(英語、韓国語、中国語)で通訳がついており、利用したのは3人で、3人とも中国語だった。報告は以上。」

趙委員長「私から1つ報告したい。昨日、第16回外国人市民による日本語スピーチコンテストがここであり、川崎市国際交流協会設立20周年記念ということで、盛大に行われた。参加者は18名の中、1位、2位、3位に、漢字圏でない人が入賞した。ちなみに、川崎市長賞を取られた人は非常に表現力も豊かで、話の内容も非常にもしろいということで、評価が一番高かった。インド、シンガポール、ミャンマーの人が上位に入った。普通は日本語をしゃべるといことは漢字が読めると学習しやすい部分があるのだが、漢字圏でない人が上位を占めたということが印象的だった。日本語も流暢で、アイデアも発想もよかったし、外国人の視線というのが、観客の皆さんにも共鳴していたと思う。ぜひ皆さん、ご友人と機会があったら参加してもらえると、もっと盛り上がると思う。よろしくお願ひします。ほか審議会等委員の報告はあるか。」(なし)

し)

趙委員長「続いて、その他に移りたい。その他で何か、意見や質問等はあるか。なければ、皆さん一人一人分ぐらいで、第7期の会議を振り返って話してもらいたい。感想でいいので、お願いします。」

鈴木委員「第7期に参加して本当に光栄だと思う。皆さんとつき合い、楽しかった2年間ですごく勉強になった。」(拍手)

千田委員「4年間ありがとうございました。私にとって代表者会議は、人と人とのつながり、日本に住んでいるほかの外国人とのつき合い、日本語の勉強以外に、もっと深い意味が見つかったので、皆さんに感謝したい。」(拍手)

姜委員「私にとってこの場は、学習の場になった。経験が不足していて、深く議論できないことは残念に思う。来期も続けるメンバーで、母語に興味がある人は、来期はぜひ深い議論をお願いしたい。」(拍手)

高委員「朝鮮語にバンチョッパルという言葉があるが、私は半分日本人みたいになっている。しかし、この会議に参加して外国の方々と知り合えたことが、非常に勉強になった。また、考え方も違われ、おのおのの主張をするということに対し、多くを学んだ。」(拍手)

殷委員「外国人市民代表者会議を通して、私の前に日本の社会、市民の社会の扉が開かれた。これから、川崎市のいろいろな活動に参加して、外国人市民、川崎市民の一員ということに実感がある。外国人市民代表者会議に感謝している。」(拍手)

モハマド委員「会議に参加した当初は、日本語があまりできず、まだ学生だということで、心配したが、会議が進む中で自信も高まった。皆さん、これからこの会議で話したことを忘れずに、どんどん活躍してほしい。そして自分のことだけではなく周りも見て、正しいと信じるなら、どんどん人に述べてほしい。そうすれば、豊かな川崎市が実現できると思う。」(拍手)

バラード委員「本当に充実した4年間だった。いろいろな外国人と触れ合って、すごくいいものを得たので、この代表者会議に参加して光栄だった。これからも次の会議に参加する者のために頑張ってもらいたい。」(拍手)

上田委員「私は第6期と第7期を務めた。この会議で皆さんと出会ったのが私の一番いい思い出だと思う。最初のころは困ったことをあまり感じていなかったもので、これからもこの会議の経験を生かして、外国人のためにボランティアや仕事を続けたいと思う。」(拍手)

クシュタ委員「私は、この会議に第4期・第5期・第7期と3期参加している。もともと私は、日本という国はどんなことがあっても無関心な社会だと感じていたので、この会議に参加できたことをうれしく思う。この会議について、外国人があまり知らないことを残念に思う。工夫して会議のアピールをしなければいけないと思う。日本は長く住めば住むほど、自に見えない問題がだんだん出てくるのでこの会議は本当にいいと思う。すばらしいメンバーで、仲よく話したり、食べたり、いろいろあってよかった。審議するときに日本語が完璧ではないことは当たり前だが、うまくできないときに朴さんがまとめてくれて、よかった。」(拍手)

古谷委員「初めは右左もわからなかったが、2年たつと、自分なりに成長したなと思う。いろいろな立場でものを考えるようになった。言葉はもちろん、いろいろ進めるところや至らないところがあると思うが、事務局の方や、仲間たちのご支援、ご指導ありがとうございました。(拍手)

アディカリ委員「私も初めての代表者会議だったので、最初はどのように私を表現すればいいのか、質問や内容など不安に思っていたが、やりやすい雰囲気と、いい仲間と、言いたいことをちゃんと

言えて、提言までもっていったことは、代表者会議の目的を達成できたと感じている。外国人として日本に住んでいるので、自分の仕事と生活だけでいいという考えだったが、市民祭り、多文化フェスタ、オープン会議など企画や実行委員会にも入ったことで、実際の市民としての活動をきちんと理解できた。」(拍手)

朴委員「私は第6期と第7期を務めたが、第7期の場合は、若い人たちが多く、視野も広がったので、2期の中でも記憶に残ると思う。日本に来て、12、3年になるが、代表者としての活動は外国人らしく思われる場だった。町に出てしゃべらないと日本人に間違えられることが多かったが、この会議では一度も日本人に間違われることなく、外国人として待遇されたので、本当に自分らしく生きる場所だと思う。2回とも部会長をやったが、部会や周りの皆さんのさえのおかげで、重い任務を果たしたと思う。これからはここで勉強したものを、どこかに必ず生かせるような、外国人になってほしい。」(拍手)

趙委員長「私は第6期からで、代表者会議の中でも数少ない日本語を母語とする外国人だが、第6期のときには、カルチャーショックも正直あった。しかし回を重ねるに従い、休憩時間に話をしたり、各種行事を通じて、皆さんと会議以外の家族の話などすることがあり、お互いを身近に感じるようになってきたと思う。会議の中では一生懸命お互いの意見をぶつけ合いながらも、相手を否定するのではなく、お互いをうまく理解し合うというのが、私にとっての多文化共生である。それまでは、周りに日本人しかいない中で外国人という感覚を持っていたが、堂々と外国人というアピールができて、第7期で委員長という肩書をいただいたことによって、議会での報告やテレビ取材を通じて、近隣の方にも、この子は外国人だったんだという認識ができてきた。この会議以外で、町内の中でも外国人の問題が、いろいろあるんですよという真摯に聞いてくれる人や協力できることは協力したいと言ってくれる人がいて、すごく励みになった。それまでは自分の外国人の部分を出さなかったが、この会議が後押ししてくれたおかげで、私生活においても外国人問題を素直に語れるようになった。この会議を長く続けてもらうために、皆さん一人一人が積極的に外国の方をこの会議に出していただき日本の方も含めて関心を持ってもらえる環境づくりを、川崎市の中で、進めていければと思う。」(拍手)

エロック副委員長「皆さんと一緒に、いろいろなことを話し合ってきて、私も多文化共生の中で生きてことを改めて実感した。代表者会議に入る前は川崎市の政策がこんなに進んでいることは全くわからなかったが、代表者会議で話し合ったことなどをインドネシア人の集まりや東京の外国人女性企業者の集まりに持って行った。それを聞いて外国人も日本人も本当に驚いている。すばらしいことなので、ぜひこのまま続けていただきたい。代表者会議があまり知られていないというところに心が痛む。これから第8期で頑張る方々には外に出たときに会議のことを宣伝してほしい。それに関連して、今後事務局に提案を申し上げたい。次回第8期からは、最初から名刺をつくった方がいい。私たちの活動をアピールするのに、川崎市というシンボルが入っている名刺を持っていた方が、絶対にアピールのレベルが上がると思う。自宅で代表者会議のホームページをみるために代表者の名刺をほしいと言われるので、いろいろな集まりに行く代表者のために最初から名刺をつくるのがいいと思う。」(拍手)

張委員「私は1期半参加した。教育文化部会では最初、学習支援と、多文化と、母語という3つの項目で議論したが、時間が足りず最後の母語について十分に議論していないことが残念だ。事務局で、教育の提言の2番目の文書はうまくつくったと思う。母文化のこともアピールできている。しかし母語の問題は引き続き議論して欲しい。一生懸命に頑張りますので、これからもどこかで会っ

たらよろしく願いいたします。」(拍手)

権委員「2年間、多くのことを学び、多くのことを感じ取った。例えば、多文化共生の難しさ、それぞれの歴史を背負った私達が相互理解するときに、壮絶な時間もかかるということで、大変さがあるということを感じた。今日、提言をまとめあげることができたが、内容がとてもすばらしく、非常に感動している。2年間、本当にありがとうございました。」(拍手)

高橋委員「この2年間、本当にどうもありがとうございました。皆さんのことを忘れないです。本当に楽しかった。また、どこかで会うと思うので、よろしく願いいたします。」(拍手)

楊委員「6期と7期、4年間、大変お世話になりました。今日はしつこいような質問の仕方、あるいは提言に対する意見を出したが、これほどこだわる理由は、僕がちょうど10年前川崎市に住み始めた頃、川崎小学校で異文化講師をやった。僕は餃子づくり、遊び方、歌を教えた。最後に子どもたちが歌ってくれたのだが、子どもたちの素直な声で、非常に感動を与えてくれた。その感動がエネルギーとなって、自分はこの会議で川崎市にもっと異文化、お互いに理解できる地域社会を作れば良いと思った。会議の中で、私が黙っているとき、あるいは眠いときに、あの異文化に対する興味津々の小学生の顔が浮かんでくる。やはり、川崎市民の小学生、中学生は異文化に対する興味やもっと知りたい、触れ合いたいという気持ちを持っていて、そのエネルギーをもらって私はこの会議で行動しているように思う。また4年間、自分がしたことよりも、この会議からもらったことのほうが大きい。これからも、この会議とかかわり、常に異文化理解の最前線で戦っていきたい。あるいは周りの人と仲よく、よりよい深い理解をできれば良いと思う。」(拍手)

金委員「今までの皆さんの感想を聞いて、自分も同じ思いをもっている。2年間を皆さんと一緒に、外国人の今ある問題を、議論し、提言できて、すごくよかったと思っている。日本に来て10年が経つが、初めは広島で、大阪、東京、川崎と移ってきた。今、川崎は自分の家だと思っている。自分は川崎の市民の一員でよかったと思っている。なぜならここは外国人としても住みやすいところで、これからもずっと川崎に住みたいと思う。この思いをほかの外国人にも伝えていきたい。だから、もっと外国人市民の役に立ちたいと思う。」(拍手)

中森委員「代表者会議のメンバーとして、自分は感じていなかった問題を、いろいろな国の方たちと、解決しようと議論し、解決につながっているのが、素晴らしいと思う。この代表者会議があるおかげで、いろいろな国の方たちに、川崎が住みやすい場所になっていることに感謝している。これからも皆さん、ここだけで終わらず、いろいろな場所で活動してほしい。」(拍手)

趙委員長「皆さん、どうもありがとうございました。いろいろな思いがあって、いい感想だったと思う。それでは、2009年度第4回第2日川崎市外国人市民代表者会議を閉会したい。お疲れさまでした。」